

日本人英語学習者にとっての into : 状態変化の経路に横たわる境界を越えて

江口, 巧
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/6779645>

出版情報 : 英語英文学論叢. 73, pp.1-20, 2023-03-17. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



日本人英語学習者にとっての into

— 状態変化の経路に横たわる境界を越えて —

江 口 巧

1. 序

英語の前置詞 into は、その概念的意味として、対象物がある領域の「中に入り込む」というイメージでとらえられることが一般的である。この空間的なイメージは日本人の英語学習者にとって比較的把握しやすく、以下の英文が示す通り、周辺で起こる様々な事象を into を用いて適切に表現することが可能となる。

- (1) He walked into the room.
- (2) She pushed him into the elevator.
- (3) He hammered the nail into the wall.

また、この空間的イメージは抽象的な概念に応用することもでき、典型的には状態変化を表す表現として、やはり学習者にとってはある程度なじみのある表現形式のひとつとなる。

- (4) The system turns heat into energy.
- (5) He translated French into Japanese.
- (6) He broke the vase into pieces.

その一方で、以下のような例になると、日本人学習者にとっては into を用いて表現することが幾分困難になってくる。

- (7) She danced into the hall.
- (8) The village developed into a large town.
- (9) He tore the shirt into bandages.

(adapted from *Youth Progressive* 英和辞典)

本稿では、日本人の英語学習者にとって、(7)-(9) のような例に関して into を用いた英文の産出を困難にするさまざまな要因を言語学的に明らかにすることを目的とする¹。そしてその要因として、該当する事象に対する日英語の概念化の違い、またそれと関連して、英語が satellite-framed language (衛星型枠づけ言語) であるのに対し、日本語が verb-framed language (動詞型枠づけ言語) であることが指摘される。また、上にも述べたように、対象物が空間的にある領域内に入り込む空間的位置変化に対し、より抽象的な対象物の状態変化・結果状態への移行は、日本語の母語話者にとっては複数の情景をたどることになり、前者に比べ、より複雑な概念化を経ていることが示唆される。最後に、上のような議論を経て、英語は into を用いて対象物の変化過程のより柔軟なコード化を可能にする言語であることが明らかとなるが、同時にそのようなコード化は無制限に許されるわけではなく、意味論的・語用論的・語彙的な制約を受けることを論じる。

以上、本稿は、日本人の英語学習者にとっての前置詞 into の産出可能性について英語学的観点から論じるものであり、その意味で、英語教育と英語学との橋渡しとなることを目指した論考である。

2. 空間的位置変化

2.1. 事実観察とその要因

ここでは、日本人の英語学習者が動詞と into 句が共起した英文を産出することが可能かどうかに関して、産出できない場合、その理由は何であるのかを探っていく。まず本節では、into を用いた空間的な位置変化を表す表現について考察する。

まず、以下に挙げた二例はいずれも、日本人学習者の産出には問題のない表現である。

1 本稿で扱うのは into の産出に関わる問題であり、英語の修得に伴う 4 技能のうち特に英語のライティングを念頭においている。日本人の英語学習者にとって、into が用いられた (1)-(9) の意味を読み取ることは、幾分難しい (9) を除いてそれほど問題とはならない。しかし、英語を読めることが即書けることにはつながっておらず、本稿はそのような一つの領域として前置詞 into の用法を扱う (cf. 江口 (2015, 2016))。

(10) She went into the room.

(11) She walked into the room.

(10) では移動動詞の go が、(11) では移動の様態に重点を置いた動詞 walk が用いられている。これらの二つの動詞は厳密な分類では異なるが、walk も「移動動詞」の範疇に含まれると見なすことができる。その証拠として、以下に示すように、移動様態動詞は直後に Route（中間経路）を表す補部の名詞句を取ることができ（例（12））、また、移動の距離を表す表現との共起が可能である（例（13））。

(12) Mary {walked/ran/jogged/crawled} the street to the station.

(Namiki (2015: 116))

(13) John {ran/walked/swam/galloped} {a certain distance/a mile}.

(Namiki (2015: 117))

このため、(11) においても、(10) と同様に、広い範疇の移動動詞を、着点を含む方向を表す into と共起させることは日本人学習者にとってさして問題とはならない。

一方、(14) のような文になると日本人学習者にとって産出が難しくなる。

(14) Mary danced into the room.

現に、筆者が英語の授業を担当する九州大学の日本人学生42名を対象に、以下の日本文（15）を提示し、これに相当する英語を書くよう指示を与えたところ²、(14) のように dance と into を共起させた英文を書い

2 日本人の英語学習者が前置詞 into を用いた英文を産出するかどうかを調べる際、まず（15）のように意図する内容を日本文で示し、それに相当する英文を書くように依頼した。ただし、この調査が into を用いた英文の産出可能性を調べる目的であるというこちらの意図を学生に悟られないよう、調査全体として取り上げた文の内容は into が表す空間移動や状態変化とは全く関係のない文も全体の7割程度含めた。また学生には、該当する日本文に相当する英文を複数思いつく場合には、それらもあわせて書くよう指示を与えた。

た学生は一人もいなかった。

(15) メアリーは踊りながら部屋に入っていった。

この理由は、(11)において walk が広い意味での移動動詞と見なされたのに対し、dance は移動動詞ではなく、「動きを伴う行為動詞」(cf. 米山(2009))とされる性質によるものと思われる。先に挙げた Route や移動の距離を表す要素との共起に関しては、dance は以下に示すように、不適格な文を生み出す。

(16) *Mary danced the street to the station. (Namiki (2015: 116))

(17) *John danced {a certain distance/a mile}. (Namiki (2015: 117))

このことから、意味論的に見ると dance は移動を表す動詞でないため、日本人学生にとっては into との共起が難しく感じられるものと思われる³。

さらに、調査で学生に示した(15)の日本語を再度見てみると、「踊りながら部屋に入っていく」という表現からわかるように、「踊りながら」は移動に付随する行為を表しており、踊る行為は着点へと向かう移動と直結していないことがわかる。着点となる部屋の中への移動はむしろ「入っていく」で表現されている⁴。このため、日本人学生にとっては該当する事象を“dance into …”のように一つの節に収めて表現する発想にたどり着かないのだと思われる。現に、英文を書いた学生の中には、以下のように、into と直結する表現としては go を用い、踊る行為はあくまで付随行為として、移動とは切り離して表現しているケースがあった。

(18) Mary went into the room while dancing.

このことは、日本人がこの事象を概念化する際、「踊る」行為と「着点へ

3 さらに、「踊る」行為は移動を伴わずに行うことが可能であることからしても、意味論的に dance が移動動詞の範疇に含まれないことは明らかであろう。

4 2.2. 節における、日本語を「動詞フレーム言語」とする議論を参照のこと。

の移動」を一つの事象としてとらえていないことの証拠になりうると思われる。

一方英語では、(14)に示すように、本来移動ではない「踊る」行為を着点への移動と結びつけてひとつの節にコード化することが可能である。これは、動詞 *dance* が、以下に示すように *along the street* と共起可能であることから、文脈によっては移動を含意することによるものだと見なすことができ、このことは「動きを伴わない行為動詞」(cf. 米山(2009))として分類される *smile* の場合と対照的である。

(19) Mary danced along the street.

(20) *Mary smiled along the street.

以上のことから、英語では、空間移動の場合、*go* や *walk*, *run* などのように意味論的に移動を表す動詞ばかりでなく、*dance* のように、概念的意味として移動を含まなくとも、語用論的に移動を含意する動詞も着点への方向を示す *into* 句と共起することが可能となる。しかし、日本人学習者においては、後者の場合には、該当する事象の日本語特有の概念化の影響もあり、*into* と共起した文を産出しない傾向にある。

2.2. 動詞フレーム言語とサテライトフレーム言語

前節で論じた、日本人学生が *dance* のような移動動詞の範疇に含まれない動詞と *into* 句とを共起させない傾向にあるという点に関して、他の要因として英語と日本語の類型論上のカテゴリーの違いも考えられ、本節ではこのことを論じておく。

Talmy (2000) は、移動事象のコード化に関して、中心的な概念である「経路」を動詞で表現する言語と、動詞以外の例えば前置詞・不変化詞などのサテライトによって表す言語とに分類するタイポロジーを提案し、それぞれ *verb-framed language* (動詞フレーム言語)、*satellite-framed language* (サテライトフレーム言語) とした。この分類によると、前者にはスペイン語などのロマンス語や日本語、後者には英語などのゲルマン語が含まれるとされる。

既に見た例を挙げて述べると、部屋に歩いて入っていく事象は、英語・日本語でそれぞれ以下のように表される。

(21) She walked into the room. (= (11))

(22) 彼女は部屋に歩いて入っていった。

移動の経路は、(21) では into the room のサテライトによって、(22) では「入っていく」という動詞によって表されている。

そして、踊りながら部屋に入っていく事象は、英日それぞれ

(23) Mary danced into the room. (= (14))

(24) メアリーは踊りながら部屋に入っていった。

となり、ここでも経路は先の例と同じ要素によってコード化されている。

つまり、日本語では、移動の経路は「移動動詞」によってコード化するのが言語としての慣習であり、「踊る」のような移動動詞でない動詞は経路としてコード化されないのである。その結果、2.1. 節で述べたように、「踊る」は移動に付随する行為として「踊りながら」の形式でコード化される。このため日本人学習者は、英語を産出する際に、移動事象に関する日本語のコード化の規則をそのまま適用する傾向にあり、このことが (23) のような dance と into 句が一つの節で共起する文を生み出しにくくしていると考えられる。つまり、経路のコード化における日本語と英語の類型論的カテゴリーの違いが、上に見たような英文の産出を阻む一つの要因となっていると言える。

2.3. 使役移動

次に空間的位置変化のさらなるケースとして、使役移動の場合を見ておく。

(25) She pushed him into the elevator. (= (2))

ここで用いられている動詞は push であって、必然的に被動者の移動を entail しているため、方向句 into との共起は日本人学習者にとっても問題はない。ちなみに、これに相当する日本語を見ても、

(26) 彼女は彼をエレベーターの中に { 押した / 押し込んだ }。

のように、動詞が「押す」であれ、複合動詞の「押し込む」であれ、やはり被動者の移動を entail しており、該当する事象の概念化は日英語ともに同じ過程をたどる。

さらに次のような例を見てみよう。

(27) He hammered the nail into the wall.

ここで、打撃動詞 hammer を用いた hammer the nail は、意味論的に被動者の the nail が移動することを entail しない。次のように、ハンマーで打っても釘が全く動かないこともありうるからである。

(28) He hammered the nail, but it did not move at all.

従って、釘を打つことで釘が壁の中にのめり込むのは必然的ではないため、その行為から生じる語用論的な含意と考えられる (cf. 江口 (2022: 253))。しかし、上の dance のケースでも見たように、英語では対象物の移動が語用論的に含意される場合、動詞がその移動の経路を示す into 句と共起することは可能である。そして、日本人学習者にとっても、(27) のような英語を産出することは困難ではない⁵。その理由の一つとして、(27) に相当する日本語では、以下のように複合動詞の「(ハンマーで) 打ち込む」が用いられるからである。

(29) 彼はハンマーで釘を壁 (の中) に打ち込んだ。

「打つ」だけでは、英語の hammer と同様に被動者である釘の移動を意味論的に entail しないが、複合動詞の「打ち込む」では、後項の「込む」により、対象物がある物の中に入り込むことが entail されることになる。日

5 日本人学習者に英語を書かせた調査(動詞に hammer を用いるという情報はあらかじめ与えている)では27.6%の学生が動詞 hammer と into the wall を共起させた表現を用いた。なお、前置詞を into に限定せず、移動後の着点を表しうる to および on を用いたケースを含めると、その割合は86.2%に上った。

本語ではこのように、このケースにおいて着点句と自然に共起する複合動詞が存在するため、それにより、英語の産出の際にも into 句との共起が容易になると思われる。

2.4. まとめ

以上、空間的位置変化に関する2節の議論をまとめると、英語では動詞が着点への移動を意味論的もしくは語用論的に含意する場合、方向句の into 句との共起が可能である。この点において英語は柔軟性の高い言語であると言える。しかし、日本人の英語学習者においては、動詞が意味論的に移動（使役移動を含む）を表す場合を除いて、into と共起した英文の産出は難しくなる傾向にある。そして、これには日本語に固有の事象の概念化や、経路のコード化に関する類型論上、日本語が英語と異なる範疇に属しているといった要因が関わっていることが論じられた。

3. 状態変化・結果状態への移行

3.1. 事実観察

序節で述べたように、into がもつ基本的なイメージは、空間的に対象物がある領域の中に入り込むというものであるが、これは抽象的な概念にも適用でき、対象物の状態変化あるいは変化結果への移行を表すことも可能である。本節では、日本人学習者においては、動詞とそれが表す行為がもたらす状態変化を一つの節でコード化しない傾向にあることを観察し、その理由を探っていく。

まず、状態変化の表現で日本人にとって把握しやすい表現を見ていく。

- (30) The system turns heat into energy. (= (4))
 (31) She changed into a different person.
 (32) He translated French into Japanese. (= (5))

これらはいずれも、(32)における言語間の翻訳のケースを含め、対象物の状態の変化を述べたものである。現れた動詞は広い意味で状態変化を表すものであり、変化を被る対象の変化結果は動詞にとって必須の項となっている。これは、日本語の「…に変える / 変わる」のように、動

詞にとって必須の項を表すとされる格助詞「に」(中右(1998: 10))が用いられることから明らかである。さらに、日本人学習者の観点から言えば、学習の段階で、turn, change, translate 等の動詞は、“動詞 (+ 目的語) + into ...” がいわばセットになって提示されることが定着しており、このことも、日本人にとって、これらの動詞と into 句を共起させた産出が可能であることの一因になっていると思われる。

次のような例では、やはり広い意味での状態変化動詞が用いられているが、ここでの into 句は (30)-(32) と若干様相が異なり、動詞が表す状態変化の意味をより具体的に詳述 (further specify) したものとされる。

(33) He broke the vase into pieces.

(34) She cut onions into slices.

しかし、この用法も日本人学習者にとっては、into pieces や into slices のような変化後の状態を表す句の意味から判断して、「破損」、「切断」などを表す状態変化の動詞と関連付けることは困難なことではない。また、(30)-(32) とは細かいニュアンスこそ違え、ここでも「粉々に (壊す)」、「薄片に (切る)」のように、動詞にとっての項を表す「に」が用いられることから、日本人学習者にとって動詞と into を共起させることは比較的容易である⁶。

一方で、以下のような表現になると日本人学習者にとっては産出が難しくなる。

(35) The village developed into a large town. (= (8))

(36) She grew into a beautiful woman.

(37) He organized ideas into an outline.

まず、(35)、(36) における develop (発展する)、grow (成長する) は発展・成長した後の状態を意味論的に entail しており、日本語において

6 日本人学習者に本文 (33) に相当する英語を書かせた (名詞 pieces を用いるという指示はあらかじめ与えている) ところ、62.1% の学生が動詞と into pieces を共起させていた。なお、ここでは into 以外に to および in も可能とされるので、数字はそのケースも含めた割合である。

も「大きな町に発展する」、「美しい女性に成長する」のように、格助詞「に」が用いられる。しかし、これらの動詞に関しては、変化後の状態を記述することは、change, turn 等の場合ほど必須とはならない。(37) の動詞 organize になると、この傾向がさらに強まる。「整理した/まとめた」後の産物（ここでは outline）の存在は、意味論的というより語用論的に含意されるにすぎず、やはり表現上必須の要素とはならない。こうしたことから、日本人学習者にとっては、これらの動詞が表す状態変化の結果を into で表現するという発想に至らないものと思われる。日本人学習者を対象にした調査では、(35) の英語を書いた学生は27.6%であった。注5、6 に述べている通り、この数字は、hammer the nail into the wall や break the vase into pieces を書いた学生の割合に比べると顕著に下がっている。

さらに into の産出が難しい表現を続ける。

(38) He carved a block of stone into a statue.

(adapted from *Youth Progressive* 英和辞典)

(39) She folded paper into a crane.

(40) He tore the shirt into bandages. (= (9))

これらの英文ではいずれも、動詞が表す行為を行い、その結果ある産物が生み出されたことが描写されている。(38)、(39) で用いられている動詞 carve, fold の類は、表される行為が対象物の形状変化を伴い、同時にその結果生じる産物の存在も含意される。しかも、これらの動詞の特徴として、行為の結果の産物は動詞の直接目的語としても表れうるといふ点が挙げられる⁷。

(41) He carved a statue.

(42) She folded a paper crane.

こうしたことから、動詞とそれが表す行為の産物との関連性はかなり強

7 weave (編む) も同じ類の動詞であると考えられる。*Youth Progressive* 英和辞典においては、weave flowers into a garland は weave a garland {of/from/out of} flowers と等価であるとされている。

いと言える。にもかかわらず、日本人学習者においては、産物を into の項とする英文を産出する傾向はあまり見られない。これに関連して、筆者が日本人学生に (39) に相当する以下の日本文を提示して、これに対応する英文を書かせたところ、動詞と into を結合させてひとつの節で表現した学生は一人もおらず、(44) のように、二つの動詞を and で接続させた学生が大半であった。これは、元の (43) の日本文を直訳した形式となっており、ある程度予想された結果である。

(43) 彼女は紙を折って鶴を作った。

(44) She folded paper and made a crane.

同様に、英文 (40) に相当する以下の日本文 (45) を与え、英文を書かせたところ、やはりこちらの期待する英語は皆無で、(46)、(47) のように、二つの節に分けるか、あるいは「包帯にする」ことを目的として表す表現が大半であった。

(45) 彼はシャツを裂いて包帯にした。

(46) He tore the shirt and made bandages.

(47) He tore the shirt to make bandages.

なおこの表現に関しては、江口 (2022) で論じられたように、以下の二つの表現を比較した場合、

(48) He tore the shirt into pieces.

(40) He tore the shirt into bandages.

(48) で状態変化動詞の tear と結びついた into pieces は、動詞の意味を詳述する機能のため、動詞と意味論的な関連性があるのに対し、(40) の into bandages は、引き裂かれたシャツの特定の用途を表しており、その意味で、動詞が表す行為の「目的役割」(影山 (2005)) としての情報を与えており、動詞とのリンクは語用論的であるとされた類の表現である。

さらに、日本人学習者にとって産出が困難な例を挙げる。

- (49) He bent his fingers into a fist.
(adapted from <https://bugguide.net/node/view/285502>)
- (50) He polished a coin into a mirror.
(adapted from <https://www.youtube.com/watch?v=-nIFtz-fNdw>)
- (51) The natives used to hammer the metal into arrowheads...
(<https://dict.wiki/jp/hammer>)
- (52) She patted and stroked the baby into sleep.
(adapted from <https://www.nestedbean.com/pages/sleep-training-guide>)

(49)、(50) で用いられた動詞 *bend*, *polish* はそれぞれ対象物の形状変化、状態変化を伴うが、その結果の産物を記述することは必須とはならない。(51) の *hammer* については打撃動詞であるため、被動者が状態変化し、かつその結果産物が生まれることは動詞の意味からは導かれず、語用論的含意でしかない⁸。(52) の *pat* や *stroke* についても、動詞そのものは状態変化とは無縁の動詞であり、それが表す行為の結果、対象が「眠りに落ちる」ことは、我々が日常的に赤ん坊の体をなでて寝かしつけるという慣習に依存した語用論的含意でしかない。

最後に、これと関連して、英文 (49)-(52) それぞれに対応する日本語を示しておく。

- (53) 彼は指を曲げてこぶしを作った。
(54) 彼はコインを磨いて鏡にした。
(55) 原住民たちは金属を打って矢尻にしたものだ。
(56) 彼女は赤ん坊を軽くたたいたり、なでたりして寝かしつけた。

やはりこれらの日本語では、先に示した (43)、(45) と同様に、描写された事象が二つの動詞を用いて表現されていることについては、あえて指摘するまでもないであろう。

8 (27) においても打撃動詞 *hammer* を用いた例文 “He hammered the nail into the wall” を挙げたが、(27) において *into* 句が表すのは、釘が位置変化を経た結果としての着点であった。一方 (51) においては、*into* 句は金属が打撃という行為を受けて生まれた産物を表している。

3.2. 日本人学習者にとって into 句の産出が困難な理由

前節での観察をもとに、本節では、日本人学習者にとって、状態変化あるいは変化結果への移行を表す into の産出が容易でないことに対する理由を論じる。

全体的傾向としては、(30)-(32) に挙げたように、動詞が状態変化動詞で、変化結果も entail され、動詞の必須の要素となっているか、あるいは (33)、(34) のように、into 句が動詞の意味を詳述する機能を果たしている場合を除いて、日本人学生にとって、動詞と into 節を一つの節で共起させることは容易ではないと言える。

その理由としてまず挙げるべきは、状態変化の事象を把握する際の日英語における概念化の違いである。(38) 以降の英文に相当する日本語を見てわかる通り、動詞と結果状態あるいは結果の産物を表す表現は一つの節でなく、二つの動詞を用いて表現されている。

- (43) 彼女は紙を折って鶴を作った。
- (45) 彼はシャツを裂いて包帯にした。
- (54) 彼はコインを磨いて鏡にした。

これらを、英語の表現と形式的にあえて一致させた日本文—つまり、動詞と変化結果あるいは産物を一つの節として表現した文—にすると、不適格な文になってしまう。

- (57)??彼は紙を鶴に折った。
- (58)??彼はシャツを包帯に裂いた。
- (59)??彼はコインを鏡に磨いた。

このことはまぎれもなく、日本語では該当する事象を概念化する際、全体をひとつの事象として捉えるのではなく、二つの別個の事象として認知していることを示している。つまり日本語では、動詞と変化結果を一つの節にまとめて表現するには、例えば「シャツを裂く」と「(シャツを) ずたずたにする」の関係のように、二つの間に意味論的なリンクが必要になる。こうした密接な関係が成立すると、「シャツをずたずたに裂く」のようなコード化が可能となる。しかし、動詞と変化結果が「シャ

ツを裂く」と「(シャツを) 包帯にする」のような語用論的なリンクに過ぎないと、「*シャツを包帯に裂く」のようなコード化が不可能となり、「シャツを裂き、包帯にする」のように二つの動詞に分けて表現せざるを得ない。つまり、語用論的なリンクしかない行為から変化結果への移行は、時間的に前後し因果関係が示唆されるものの、日本語では二つの別個の事象として捉えられることになる。従って、このような事象を英語で表現しようとする、日本人学習者は日本語の事象の概念化を適用し、二つの節として表現する傾向にあると言える。

また、同様のことは、2.2. 節で触れた、経路概念を動詞で表現するかサテライトで表現するかという類型論的観点からも説明が可能である。経路概念は当然、空間的な位置変化から状態変化にも適用することができるので、後者の場合、経路は変化結果に至る過程と見なすことができる。このことを念頭に置き、上に挙げた例から (51) を取り上げ、相当する日本文とともに再度示す。

(51) The natives used to hammer the metal into arrowheads...

(60) 原住民たちは金属を打って、矢尻にしたものだ。

サテライトフレーム言語である英語では、ここで行為の結果の産物に至る経路は *into arrowheads* でコード化される。一方、動詞フレーム言語である日本語では、動詞「する」で示されている⁹。「打つ」は変化結果への経路を示すことができないためである。このように日本語では、状態変化に伴う経路は、そこに至ることを意味論的に明示する動詞でしかコード化することができない。その結果、日本語では (60) の日本文「金属を打って、矢尻にする」のように、行為動詞の「打つ」とは異なる別の動詞「する」で変化結果への経路をコード化することになる。従って、日本人学習者は英語の産出においても、この日本語の枠組みを適用し、次のような文を産出する傾向にあると言える。

(61) The natives used to hammer the metal and make arrowheads...

9 (60) は「原住民たちは金属を打って、矢尻を作ったものだ」という日本語も可能である。この場合、「作る」が行為の結果の産物への経路を表すことになる。議論の主旨は、本文で論じている「する」の場合と同じである。

3.3. 状態変化の変化結果への移行に立ちはだかる境界

さらに、日本人が変化結果を into で産出しない傾向に関して、もう一つ重要な点を指摘しておかなければならない。それは、into が表す状態変化が位置変化からの拡張とは言え、その場合の事象把握は、日本人学習者にとって容易ではないという点である。この事象把握には、位置変化の場合と比較して、抽象的な概念が関わっているからである。

サテライトフレーム言語である英語においても、具象的な事物が関わる事象より比喩的な表現の方が概念的に隔たりのある事象としてとらえられることは、Tutton (2009) において示唆されている。

(62) a. She pushed her in the elevator.

b. She pushed her {*/in/into} financial ruin. (Tutton (2009: 20))

(62 b) の financial ruin の方が the elevator よりも抽象的であり、そのため“概念的に隔たり”のある概念となる。このため、その領域に至るまでの経路により明確な境界が存在するため、その境界を超えることを明示する into が必要となることが江口 (2022)¹⁰によって論じられている。

同様のことは、日本人学習者にとっても当てはまる。日本人に関しては、2.1. 節で見たように、空間移動の場合、go や walk のように動詞が広い意味での移動を意味する場合、その移動着点への到達に into を用いることは容易であった。しかし、状態変化となると、例えば、fold, carve, bend など概念的意味として状態変化を表す場合でも、その形状変化の結果の産物に至る経路を表すのに into を用いることは容易ではなかった。

日本人学習者にとって、空間移動によって対象がある領域内に入り込むイメージは、確かに領域間に存在する境界を超えるものの、関与する移動事象全体としては一つの情景 (phase)の中で起こっていると捉えられてよいものと思われる。また、状態変化であっても、break the vase into pieces のように into 句が動詞の表す意味を詳述する場合には、into 句は新たな結果状態を導入しているわけではないので、やはり事象全体は一つの情景の中で展開していると思われる。これに対し、tear the shirt into bandages のように、状態変化を伴う行為によって対象を別の物に変える

10 江口 (2022) は、変化結果に至る経路が前置詞 in あるいは into で表される場合の条件を論じたものである。

変化については、その変化の到達点が存在する領域は、変化前の領域とは別の情景に存在するものと認識されているのではないかとさえ思われる。そのように思えるほど、状態変化に関与する二つの領域には大きな隔たりが存在するように思われる。このように考える理由は、これまでの議論で明らかになったように、日本語では、動詞と状態変化の結果のリンクが意味論的でない限り、同一の事象として概念化されないという事実が存在するからである。従って、状態変化の場合、変化前と変化後の事象間に横たわる境界は容易に超えることを阻む障壁となって、日本人学習者の前に立ちはだかることになる。彼らにとっては、この境界を乗り越えることが、目標言語である英語の概念化に沿った英文を産出する鍵になると言えよう。

既に明らかなように、日本語と比較して英語では、動詞が概念的意味として空間移動や状態変化を表すものばかりでなく、語用論的にそのような概念が含意あるいは示唆されるケースであっても、その着点への経路や変化結果への移行を動詞に後続する *into* 句で表現することができる。その意味で、英語は非常に柔軟性のある言語であると言える。日本語であれば、概念的に隔たりがあり、一つの節でのコード化が不可能とされる事象でも、英語では難なくそれを可能とする。おそらく英語のこの柔軟性は、既に見た通り、経路をサテライトで表すという類型論上の特徴を有することが大きな要因になっていると言えるのかもしれない。また英語では、ある行為とそれが引き金となってある結果が生じる一連の事象を一つの節で表現する「(派生的) 結果構文」(cf. 影山 (1996)) が発達しているが、それについても、このような言語類型論上の特徴に由来するところが大きいと言えるのかもしれない (cf. 小野 (2009))。

3.4. “動詞 + *into* 句” の過剰な一般化を阻む制約

3 節での最後に、上述した通り、英語においては、*into* が空間移動の着点や変化結果に至る経路を幅広く表すことが可能であるが、そうではあっても、そこには意味論的・語用論的・語彙的制約が存在することを指摘して本節の議論を終わることにする。

into の使用に関して、あらゆる類の行為に由来する結果を表すことができるといった過剰な一般化を避けるべき例として、まず、既に 2.1. 節で論じられた通り、移動動詞ではない *dance* が、文脈によっては移動を

含意しうるとして into 句と共起することができるとした。しかし、これも dance が動きを伴う行為動詞であるからこそ可能であって、動きを伴わない smile のような動詞では不可能である。

- (63) Mary danced into the room. (= (14))
(64) *Mary smiled into the room.

このように、動詞の意味に基づく範疇の違いが上のような容認性の違いを生み出すことから、into と共起可能な動詞には意味論的制約が存在すると言える。

また、以下のそれぞれの例で、動詞で表される行為が into 句で表された産物あるいは変化結果を引き起こすかとなると、現実問題として考えにくい。語用論的な観点から適格と言い難いケースである。

- (65) ??He wiped a coin into a mirror.
(66) ??She stretched her fingers into a fist.

さらに、状態変化の動詞の例として、以下のように動詞 grow を into 句とともに用いることが可能であることは既に見た。

- (67) She grew into a beautiful woman. (= (36))
(68) They grew into a large company.

しかし、以下のような表現になると、その適格性は下がる。

- (69) ??She got slender into an attractive woman.
(70) ??He got taller into an excellent basketball player.
(71) ??He gained weight into a powerful wrestler.

grow と同様に体の成長や変化を意味する表現であっても、get slender/taller, gain weight といった句を用いることは into の使用と相容れない。語彙的側面での制約を示唆するものである。

4. 結語

本稿では、英語において空間移動における着点への移動や、状態変化における変化結果に至る経路を表すとされる *into* が、日本人学習者には必ずしも産出されない傾向にあることを観察し、なぜ産出が容易でないのか、その理由を探った。

その結果、日本語では、空間移動および状態変化に関して、動詞と変化結果に意味論的なリンクがあるのでない限り、動詞の表す行為とその行為がもたらす着点や変化結果への移行を直結したものと捉えず、別個の事象として認識するという日本語固有の概念化があるため、英語での該当する事象の描写においてこれが干渉要因となり、*into* を用いず二つの動詞を用いた文を産出する傾向にあると論じた。

またこれと関連して、日本語は類型論上、経路を動詞で表す動詞フレーム言語に属するため、やはり、空間移動や変化結果への移行を意味論的に明示する動詞でないと着点と共起できないため、その条件を満たさない動詞は着点とは切り離れたコード化にならざるを得ず、このため、該当する英文では動詞と *into* が共起しない傾向にあると論じた。

また本稿では、位置変化に比べ、対象の状態変化という事象については、前者と異なり、変化前から変化後の状態への移行が、単に領域間の移動というばかりでなく、二つの異なる情景をめぐる展開しているのではないかと思えるほど、日本人にとっては、領域間に存在する境界は大きいものであると推察した。従って、日本人学習者が *into* を適切に産出するためには、位置変化から状態変化へと思考を転換する際に、変化前後の二つの領域間に横たわる大きな境界を乗り越える必要が生じてくる。この境界を克服した時に、彼らにとって *into* を用いた産出可能な英文の範囲は顕著に広がるであろう。

最後に、本稿のこれまでの議論で *into* に関する英語の柔軟なコード化が明らかとなったが、学習上注意すべき点として、その使用に関しては意味論的・語用論的・語彙的制約が存在するため、必要以上の広範囲の動詞とそれが表す行為の結果を *into* で結びつけるような過剰な一般化は避けるべきであることを指摘した。

総じて、日本人にとって英語を修得する際、やはり母語である日本語のコード化がもたらす影響は大きく、これに干渉されるレベルにとどまっている限りは、英語の柔軟なコード化への対応は難しいと思われる。

る。特に状態変化への移行を表すケースにおいて日本語からの干渉は大きいと言え、into に係る指導においてはその部分に最も大きな壁を感じる。また同時に、教育現場を預かる者として、日本人学生はそもそもこのようなケースで into が使用できることを認識していないのではと感じることも多々ある。従って、高校や大学での英語ライティングの指導においては、本稿で論じられてきた日本語にはない into の使用法を意識に上らせるだけでも、彼らに「目から鱗が落ちる」感覚を与え、彼らの視野を大きく開かせる効果がもたらされるであろう。一方で、英語特有のコード化をある程度理解している日本人学習者に対しては、特に状態変化の結果を into で表す際の一般化を提示せずとも、単に “bend one’s fingers into a fist,” “remodel a tearoom into a restaurant,” “organize ideas into a coherent story,” “straighten arms into wheel pose” といった具体例を提示することによって、彼らはその鋭い感性で into 句の柔軟な表現性を嗅ぎとり、into 句と共起可能な動詞の範囲を自ら導き出せる可能性があると思われる。上級の英語学習者にはより効果的な指導法かもしれない。いずれの方法を取るにせよ、日本人学習者に対しては、日本語特有の概念化を拭い去り、状態変化への経路に横たわる境界を越えることを可能にする指導が必要であると感じている。

最後に、本研究の前提として、英語において、状態変化については、動詞と変化結果の間に意味論的リンクがあるにせよ、語用論的リンクがあるにせよ、少なくとも動詞から変化結果が含意される限り、それを into 句で表現することが可能であったため、状態変化の概念化は位置変化の場合と同様であると想定した。しかし、当の英語の native speaker にとって、例えば walk into the room, break the vase into pieces, tear the shirt into bandages における動詞と着点・変化結果への移行の経路の概念化は全く同じものなのか、またこれらの句の情報処理の速度は同じなのかなどといった疑問点は依然として残っている。こうした点を含めた問題のさらなる解明については、今後の研究に委ねられることになる。

参考文献

- 江口巧 (2015) 「学生の英語ライティングに見るアスペクト」『英語英文学論叢』第65集, 31-46, 九州大学英語英文学研究会。
江口巧 (2016) 「学生の英語ライティングに見る不定世界の描写」『英語英文学論叢』第

- 66集, 15-34, 九州大学英語英文学研究会.
- 江口巧 (2022) 「変化結果を表す in/into 前置詞句の交替について」『英文学研究 支部統合号』第14巻, 251-259, 日本英文学会.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版, 東京.
- 影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて—」『レキシコンフォーラム』No.1, 影山太郎 (編), 65-101, ひつじ書房, 東京.
- 中右実 (1998) 「空間と存在の構図」『構文と事象構造』中右実・西村義樹, 1-106, 研究社, 東京.
- Namiki, Shotaro (2015) “Path Coercions in English Motion Expressions,” *Tsukuba English Studies* 34, 99-124.
- 小野尚之 (2009) 「結果構文のタイポロジー序説」『結果構文のタイポロジー』小野尚之 (編), 1-42, ひつじ書房, 東京.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Tutton, Mark (2009) “When *In* means *Into*: Towards an Understanding of Boundary-crossing *In*,” *Journal of English Linguistics* 37.1, 5-27.
- 米山三明 (2009) 『意味論から見る英語の構造—移動と状態変化の表現を巡って』, 開拓社, 東京.

辞書

Youth Progressive 英和辞典 初版 (2004), 小学館, 東京.